情報化時代雑感

随　筆

手塚慶一*

新年を迎える

新しい年を迎えると言うことは，めでたいものである。めでたいと思わなければ，人生何か喫処がたたない。一休禅師の句ではないが，正月はあの世の旅の一里塚との見方もある。しかし私はめでたい方を取る。陽気でいいからである。

最近，年末・年始の休暇を利用して家を空ける家庭が増えてきている。世の中，平和になり，豊かになって，家族で温泉旅行とかホテル暮しを楽しむのも結構である。しかし，私は力ずくででも家族一同を集め，床の間を背にして盃を上げなくては，正月を祝った気がしない。家族がどう思おうともである。

私の属する電気系教室では，昔より事始めの日に教室構成員全員が集まり，『新年の歌』を合唱する。先輩の先生方は誠によい慣習をお作り戴いたものだと，ほほえましく感謝申し上げているしだいである。財界においても，また企業においても，新年の行事を色々おやりになっておられるらしいが，私にはこの『年の始のためしとて……』の合唱だけは理由のいかんをとわず，極めて楽しい。人生の一つの時点に，愉りと潤いを感じさせてくれる。とにかく，何がめでたいのかは判らないが，面白いのである。

この世の中，たいしてめでたくないことでも，めでたいといって大騒ぎすることもあれば，ひそかに喜び，好いことだと思っていても，周りから何の反応も得られないこともある。定年退官の記念行事などもその一つである。御退官された先生がどう思っておられようと，多くの友人・子弟相い集まり，ワイワイ，ガヤガヤ感謝をしたりされたりするのも，何かめでたいような，そこはかとなく楽しいような気がして，私は好きである。単にめでたいとか，楽しいだけでなく，そのような行事がなくなったときの空白感を私は心配する。

近年，情報流通・処理機構が頓に発達し，世の中を多元的に複雑化させ，ミクロに考えれば我々の生活姿態も，慌ただしく息つく暇もない。コンピューターは単に計算や研究の道具だけではなく，事務・生産の総合的管理，行政ないしは経営レベルの問題にまで有用なツールとして，その役割を高めつつある。いわゆる情報化時代とは，どんな角度から見ても慌ただしいのである。このような時代，新年を祝い，定年退官行事を楽しむような心的冗長性は，大袈裟に言えば，人類存続のためにも不可欠な要因であろう。

ＳＩＳとＣＩＯ

最近，巷で取り汰沙されている言葉にＳＩＳ（Strategy Information System）という表現がある。直訳すれば，戦略情報システムとなり戦争には一切関係のない我々にとって，極めて物騒な表現となるが，真意はそんなものではなく，次元はうんと異なってくる。端的に言えば経営戦略のことであり競争相手の企業に勝つために，いかなる新製品を開発するか？　或は，いかなる営業手段を講じるか？　を決定する情報処理システムのことであるとお考えいただければよい。

企業内情報処理システムは，既に死語のようになっているＭＩＳの域を脱し，OA（Office Automation），ＦＡ（Factory Automation）の段階でシステム構築が行われつつある。そして今，ＳＩＳが急激な勢いでＡＩとかエキスパートシ

*手塚慶一（Yoshikazu TEZUKA），大阪大学工学部通信工学科，教授，工学博士，情報工学

ステムないしはVAN，LANなどの通信ネットワークをツールとして論じられ，既にシステムの構築が行われている企業も幾つか存在する。そこで問題になるのが，このような全社的な利潤を支配する重要な役割を持つシステムを，いかなるビジョンで構成し，いかに運用するかである。ここにCIO（Chief Information Officer）の必要性が登場する。従来企業内情報流通機構としてトップ・ダウン方式とかボトム・アップ方式などが挙げられてきている。しかし，CIOは文字通りトップに位置し，SISを中心にした情報システムの構築・運用を命令・指揮し，情報の収集ならびに意思決定をボトム・アップ的に行っていくことが必要視される。現在のところ，CIOは代表権を持つた役員でなくてはいけないと見られているのが一般である。

しかし，CIOにどの程度の情報処理知識が必要であるかとなれば，まだ多くの課題が残されており，今後考えていかなければいけない所であろう。

現在のところ，国内一部上場銘柄の中で，CIOないしはそれに準ずる役職を設置しておられる企業は数十社に満たず，誠に心もとない。よく聞かされることであるが，中堅エンジニアーが『いくら具申しても上部の壁が厚く，一向聞き届けられない』とか，『指示した内容が部下に理解されず，もどかしい』などという情報伝達・交換の問題は，このCIOの設置により相当円滑化されるものと考えられる。

一方，『SISを持たない企業は，販売競合に敗れマーケットの縮小を余儀なくされ，時代の進展に取り残されていくであろう』という警句も企業を刺激している。近い将来，SISを設置しCIOがこれを指揮するという形態の企業が急激に増加してくることは明らかな所であるが，それにしても社会の動きは益々忙しく慌ただしくなってくることは必定である。リラックスした生活姿態との共存性を求めていかなくてはいけないであろう。

ペーパーSEと
カタログエンジニアー

先日，ある会社の社長氏から一通のお手紙を戴いた。『わが社の技術担当役員や幹部技術者はカタログ・エンジニアーばかりで困る』とのお説である。カタログ・エンジニアーと言う表現から，私は直にペーパー・システム・エンジニアーなる言葉を連想した。同じレベルの発想であると思ったからである。

昔からペーパー・ドライバーという言葉がよく使われてきた。運転免許資格だけは取得したが運転をしたことがないか，する自信のない人のことを言うらしい，私の持つイメージでは，ペーパー・ドライバーとは花嫁道具の一つとして免許証だけはお持ちになっている眉目麗しいお嬢さんであることが脳裏に浮かぶ。現に，私の家に車でお越しになったのはいいが，対向車に出会いバックが出来ない為どうにもならず，車を放り捨てて先客の学生を呼びに来た可愛らしいお嬢さんがいた。典型的なペーパー・ドライバーではないだろうか。とにかく私にとっては，ペーパー・ドライバーとは可愛らしいお嬢さんでなくてはならず，少なくとも男性に与えるべき名称ではないと思っているのである。

お断りしておくが，最近の女性の各界への進出は目ざましく，人により，また所により男性を凌駕していることは充分知っており，このことについてとやかく言うつもりはない。しかし，山の天空にそびえ立つを見て，あるいは，海の静かなるを見て，詩的にして絵画的な美を見いだすように，眉目秀麗にして清楚なうら若き乙女の佇むを見れば，やはり『いいな！』と思い，『絵になるな！』と思うのは私のみだろうか？

ペーパー・ドライバーはさておいて，ペーパー・システム・エンジニアーはとなればその趣は随分と異なってくる。詩とか絵画のスケール軸上の話ではなく，事は企業経営，技術者のあり方の本質を問う問題となる。

前述の社長氏が問題にされたカタログ・エンジニアーとは，一応工学部を卒業しており，工学士の称号は与えられているが，たいした思考

活動をするわけでなく，単にカタログに書かれている内容だけを，知識の基盤として発言し，行動する方々のことを揶揄しておっしゃっておられるらしい。私もこの種のエンジニアーにはしばしば出会っている。新しい専門用語を聞きかじってはいるが，その意味を取り違えていることにも気付かず，いかにも専門家らしく，堂々と厚かましく，話をしていらっしゃる年配の方を御想像願えればよい。また，その話をメモしていらっしゃる人々の姿を拝見すれば，滑稽でもあり，可愛そうでもある。

ペーパー・システム・エンジニアーについても同じようなことがいえる。まず，よく言われることは，コンピューターないしは情報システムのことについては，概念的な知識をよく持っているが，プログラムを作るとかキーをたたく事については，全く無能である人のことをペーパーＳＥと呼んでいることである。

しかしこの種の表現は，お年を召してもキーをたたいていらっしゃる方々から出てきた発想であって，ペーパーＳＥはすべてに無能であるとは限らない。コンピューター操作は，慣れとか教育・環境の問題であって，今日では小学生でも抵抗なくキーをたたきプログラムを作る。立派な大人がキーをたたけないからといって，卑屈感を感じる必要は毛頭ない。それよりもむしろ，今日のコンピューター・マニアとかシステムエンジニアとか言われる人が，コンピューターを操ることだけでかたまってしまい，情報化社会の在り方に関する広い視野を展望しうる能力を身に付けえなくなってしまう事をおそれる。このような種族こそ，これからはペーパーＳＥと呼び，その発生を未然に防いでいくような教育を行っていくべきではなかろうか。